

An Annotated Translation of Zoroastrian
Book Pahlavi Literature, the *Dēnkard*
Book III: No. 5 from the Posthumous Papers of
the late Prof. Giky ITŌ

by Takeshi AOKI

The *Dēnkard* is one of the most voluminous Zoroastrian Book Pahlav literature, edited by Zoroastrian high priests, *durfarr bay- Farroxz d n* and *durb d- m d n* in the 9th and 10th centuries. Here presented is an annotated transcription and Japanese translation of its third volume, which consists of 420 polemics against bad religions-Manichaeism, Judaism and Islam.

Our process of preparing this translation can be divided into two steps.

- 1 . The late Prof. Giky IT made a Pahlav letters transcription and its Japanese translation preciously corresponding to Madan s *Dēnkard* edition. Unfortunately, however, he passed away before completion this work.
- 2 . After Giky IT s death, Takeshi AOKI made his work up-to-date, and added linguistic commentaries on Pahlav letters transcription and religious commentaties on Japanese translation.

This time we can print only the 53th chapter to the 61th chapter, but we hope publishing serially the whole trascription and translation of the *Dēnkard* Book III in this Memoirs.

故・伊藤義教氏転写 & 翻訳

ゾロアスター教書籍パフラヴィー語文献 『デーンカルド』第3巻訳注・その5

青 木 健

序 文

本稿は、青木健、「故・伊藤義教氏転写 & 翻訳ゾロアスター教パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その4」『東京大学東洋文化研究所紀要』第149冊を承けての続編である。本号では、『デーンカルド』全420章中の、第53章から第61章をカバーした。また、本稿でも、入力に際して、東洋文庫非常勤職員の深見和子さんのお世話になった。記して感謝したい。

第45ページ転写

(53)⁽²⁸²⁾ abar pand mard m padiš b xtag h any ud

n

aziš rang h az nig z Weh-D n

(第39章と同じなので省略)

(54) abar hand zišn mard m az nig z Weh-D n

282 Madan版第45ページ第1行目から。

h d kad r-iz- mard m hand zišn ruw n b zišn h

saz d xwad y n ab rdar pad win rišn ud r -

yišn ud payr -

yišn ud x b raftan xwad y h abar g h n ĵud-iz

ĵud tan d n-burd r n ab rdar pad raw g h ud

w bar g n g h ud

r st paywandišn h d n M zd sn ud p yram mard m

ab rdar pad bo wa ndag [ud] tuxš g h ĵud ĵud abar n

-š n xw šk r h

(55) abar 7 w zag-xw hišn k wist az h rbed

k k hangad h pad x r, k k s n h

第45ページ翻訳

(第39章と同じなので省略)

(54)²⁸³ 人間の営為について。ウエフ・デーンの示教から。

283 本章は、Molé[1963: 41-42, 423]が、イスラーム以前の古代イラン社会における階級構造と宗教的責務(xw šk r h)の関係を検討する際に、典拠の一つとして指摘

さて、靈の救済につながる、人間誰しもの営為は

王者では特に、世界の上における支配権の樹立と確立と

綺飾と

(そのの)よき進展のためであり、信徒たち

の各自では特に、マズダー教の進展と依信と

正しい持続のためであり、また衆庶の人(たち)では

特に、彼等(各自)の責務に各自が完璧に努めるため

あるべきだ(saz d)。

(55) 弟子が師匠に七つのことばを^{ヘルベト}求めること(=七質問)について。

一は誰から財貨における富が(出るのか)、一は誰から生靈の

第46ページ転写

している。彼によれば、この部分から、

軍人貴族階級にはエーラーン・シャフルを確立して社会秩序を維持する責務があること

神官階級にはゾロアスター教の司教と宣布の責務があること

それ以外の階級には上位階級に仕える責務があること

が読みとれる。

gy n, k k pahr z az win h, ud k k abz n

xrad, ud k k waxšišn xwarrah, [ud] ud k k

d st h amarag n

mard m awiš, ud k k tan wir yišn ud ruw n

b xtag h aziš

baw d

(56) ud passox h rbed az nig z Weh-D n

h d h mag warz n pay r y n +ud⁽²⁸⁴⁾ ast-w n d baw h

pad x r n ast niger andar n st ud s n š d h pad

d d r

pad gy n pad d d r wisp g h m n⁽²⁸⁵⁾ ud az win h pahr z

ab r-d nišn šb m hand š ud pad xrad baw h abz n g

284 をudにエメンドし, ast-w n d...pad x rで「財貨に於いて存在するものの獲得者」ととった。Fazilat [2002: 203, 9V]は, この箇所の+ud ast-w n dを[ast] ud hangadとし, pord shte az d r ' (= 「財産を充分持っている」) とペルシア語訳している。どちらにしても大意に差はない。財宝・財産の意味を表すとしたら, astを省略してhangadとするFazilatの読みの方が素直だが, 直後にも出てくるastを生かすとしたら, 本稿のようになる。

285 m'nととってm nと翻字し, 「~のもとにあれよ」と訳した。11行目のm nišnも同じ。Fazilat [2002: 203-204]は, myynととってm nと翻字し, biy nd sh, dar nazar var (= 「念じよ」) とペルシア語訳している。パフラヴィー文字の表記上は両方可能。

pad hučašm h niger d m n [u-š] u-t xwarreh baw d

waxšišn g m nišn⁽²⁸⁶⁾ pad mard m d st h mard m

wir y⁽²⁸⁷⁾ u-t

mard m ab rdar baw nd d st +waran⁽²⁸⁸⁾ az tan b r n

kun u-t tan

+wir st +ud ruw n b xt baw d

(57) abar d n M zd sn d n g h ham g az d n M zd sn

ast h az nig z Weh-D n

h d d n M zd sn d n g h ast h az-iz n -š

286 ここも、表記上はm nišnもあり得る。注295参照。

287 Menasce [1973: 64]は、翻字は示していないものの、ここをRends droitと解し、全体としてはRends droit l'amitié des hommesとフランス語訳している。本稿でも、これに準じた。他方、Fazilat[2002: 203, ㊦]は、この単語を[ud] gr yと翻字し、全体をger y n be d st -ye mardom b sh (=「人々の友情への傾向を持つ」とペルシア語訳している。両方可能。

288 原文にはdlwnとある。末尾のnを虚字と見ればdr =「嘘、嘘の悪魔」と解釈でき、虚字と見なければdr n =「儀式用の聖餐(注70参照)」と解釈できる。Fazilat [2002: 203, ㊦]は、前者の解釈を取っている。Menasce [1973: 64]は、翻字は示していないものの、ここをla concupiscenceとフランス語訳しているので、waranとエメンドしたと考えられる。本稿では、これに準じた。文脈から類推すれば、「身体から放出する」ことによって「身体を整える」ものなので、ゾロアスター教的にマイナス・イメージを持つ「嘘の悪魔」でも「欲望」でも、文意は通る。

pety rag frehbūd ud ab b d xwad ast paym n d n

xwad h +ham st r d n g h frehb d br dar d g⁽²⁸⁹⁾ ud ab b d

ham st r g pety rag az-iz n Weh-D n w spuhra-

g n

hud n g h mehm ndar n Weh D n ab rdar wirr -

yišn h

第46ページ翻訳

平安が，一は誰から罪悪からの防衛が，また一は誰から知慧

の増長が，また一は誰から光輪の成長が，また一は誰から

一般の人々のその者（誰）に

対する友情が，また一は誰から身体の保健と魂の

救済が

出るのか。

（56）そして師匠の返答。ウエフ・デーンの示教から。

さて，意欲を働かせよ，足を動かさせよ，そうすれば汝は財貨において

存在するものの

獲得者となろう。存在しないものの中に（真に）存在するものに囑目せよ，そ

289 伊藤氏は，珍しく br dar d g を見落としているので，原文に従って補った。

ゾロアスター教パフラヴィー語文献『デーンカルド』第3巻訳注・その5

うすれば（汝は）創造主（と汝の）生霊とに対して平安・歡
喜者（となろう）。全知なる創造主のもとにあれよ、うすれば汝は罪
悪から免れよう。

善知の暁紅神^{ウシャス⁽²⁹⁰⁾}を念じよ、うすれば知恵において汝は増長しよう。

慈眼をもって諸創造物に目をかけよ　うすれば汝の光輪は成長する

であろう。人々（相互）間の友情と共にあれよ（m nišn）と

（いって）人々を導けよ　うすれば人々は
特に汝の友人となろう。欲念を汝の身から放出せよ
うすれば汝の身体は
整えられ　また霊は救われるであろう。

（57）⁽²⁹¹⁾ マズダー教学がすべてマズダー教の存在から出ている

290 原文の šb mには、「暁、朝まだき」の意味しかない。Menasce[1973: 64]も、単にauroreとのみフランス語訳している。また、Fazilat[2002: 9V]は、ここをdar dam-d m -ye pag h（＝「夜明け近くにおいて」）とペルシア語訳しているが、原文にはdar（＝「～において」）に当たる語句は見あたらない。やはり、šb mは「念じる」対象であり、そうである以上は何かの神格と解釈すべきである。

ゾロアスター教の諸神格の中で暁の神と云えばウシャフになるので、本稿では「善知なる暁紅の女神ウシャフ」と意識した。このウシャフは、『ヴェーダ』のウシャスと同祖のインド・イラン共通時代からの神格で、ゾロアスター教の中では「ガーサー」5 - 5、「ヤシュト」5 - 62、「ウィーデーウダード」18 - 15, 23で言及されている。（Maneckji Nusservanji Dhalla, *Zoroastrian Theology from the Earliest Times to the Present Day*, New York, 1972 (reprint of 1914), pp. 128-29参照）しかし、諸神格が整理・淘汰された後のサーサーン王朝時代のパフラヴィー語文献中にウシャフが登場することは稀なので、この章の原型の成立年代は相当古いと予想される。

291 本章は、Zaehner [1956: 91]が、サーサーン王朝期ゾロアスター教の中心教義

ことについて。ウェフ・デーンの示教から。

(原文に従えば, D n M zd sn D n g h = マズダー教神学) は「中庸の徳」であると論じた際に, 典拠の一つとして指摘した部分である。ゼーナーの「サーサーン王朝期ゾロアスター教の本質 = 中庸の徳」説の詳細については, R.C. Zaehner, *The Dawn and Twilight of Zoroastrianism*, London, 1961, pp. 285-90を参照。それによると, サーサーン王朝期ゾロアスター教に於ける「中庸の徳 (paym n)」概念は, 教祖ザラスシュトラが唱えた「天則 (aša)」概念にアリストテレス哲学を加えて洗練したもので, 以下の4つのカテゴリーに分類される。

宇宙原理として: 徳の原理として, 過多と過少の悪からの救済を保証している。

オフルマズドとアフレマンの条約として: paym nは「条約」と訳すことも可能な語で, オフルマズドとアフレマンの9000年間の闘争時代 = 「この世の限定時間」を取り決めた「条約」の意味でも用いられる。サーサーン王朝期ゾロアスター教の神学に従えば, この「この世の限定時間」の故に, 現世での不可避的な悪が, 時間の彼方でいつかは消滅することが保証されている。

叡智の本質として: paym nは「叡智 (xrad)」とも同一視され, 「この世の限定時間」の中では, 倫理を遵守する社会規範として作用する。当然, アフレマンの創造物が悪を発散するのを防ぎ, 善を推進する原理なので, オフルマズドがアフレマンとの闘争に際して使用する武器とも捉えられている。

両極端を回避する徳として: paym nは, 自然界にあっては秩序を保つ原理として作用し, 倫理的には人間の行動を導く原理として作用する。両極端の悪を回避する, 一種の調和の原理である。

ゼーナー以降, パフラヴィー語文献を用いてサーサーン王朝期ゾロアスター教の思想構造を解明する研究は, モレ, ムナス, シャーケードや伊藤義教によるものを除いて殆どなされていないので, 彼の所説がどれだけ妥当であるかは直ちに判断できない。管見の及ぶ限りでは, シャーケードが, サーサーン王朝期ゾロアスター教によるアリストテレス哲学の中庸概念の受容を, 積極的に認める論考を発表している。Shaul Shaked, "Paym n: an Iranian idea in contact with Greek thought and Islam," *From Zoroastrian Iran to Islam*, Aldershot / Hampshire Brookfield / Vermont, 1995, pp. 217-240参照。この他の論点であるpaym nとašaとの継承関係, paym nがサーサーン王朝期ゾロアスター教思想に占める位置などは, 今後の研究者の検討課題として残されている。

さて、マズダー教学の存在はその敵たる

過多と欠如⁽²⁹²⁾のそれ(存在)から来ており、(マズダー教)自体はデーン
の自性たる

中庸である。仇敵の学たる敵対関係の⁽²⁹³⁾過多と欠如(即ち)

対抗的なる仇敵(の存在)は ウェフ・デーンの特別なる

深い学に通じているものたちのそれ(存在)から来ている。ウェフ・
デーンに特にかけられた信仰

第47ページ転写

ud d n g h ham g az d n M zd sn ast h az-iz

hand šišn g

ud g wišn g ud hunišn g d n g h n k

d n m zd sn +ud +k -iz⁽²⁹⁴⁾

292 ab b dを「欠如」と訳した。字義通りには「欠く+存在」で、まさに「欠如」。
しかし、この文脈では、frehb d(「より多い+存在」=「過多」)の対義語として
用いられているので、Zaehner [1956: 91]のようにdeficiencyの訳も適切。

293 「敵対関係の」は、br dar d gの訳として補った。注289参照。

294 原文はMN-z=az-iz。注294も部分も含めてここを原文通りにとると、n k
d n M zd sn az-iz šmurišn n mad st dとなり、Fazilat [2002: 9V]はここを、
n kas n ham ke be dorost -ye d n-e Mazd ' va k r yand -ye zamzame-h
-ye n d n pey na-borde-andと、かなり補った上でペルシア語訳している。どち
らにしても、そのままでは文意がとれない。

šmurišn r y⁽²⁹⁵⁾ mad st d har az d n M zd sn
ast h
ud payd g h payd g

(58) abar xwad y h ud d n az nig z Weh-D n

h d xwad y h [] d n ud d n xwad y h m day n

ast h az Weh-D n [ud] nig z andar n w zag

aw š n-iz

hambas n k š padiš hamd dest n h pad n -š n

xwad y h

abar d n d n abar xwad y h win rdag h k š h-iz

weh n

d n frag n bun w zag staw n h abar Ohrmazd

bandag h ud +meh nišn

d n k az did +awis nišn⁽²⁹⁶⁾ r h xwad y h

meh n d r h [] az

d n ud Ohrmazd bandag h mehist h d n az

xwad y h u-š n

ab rdar br zišn s d meh n paywast r h [ud] d m n

pad

295 原文はLA=n。詳しくは注293参照。

296 原文では'wsynšnだが、Menasce [1973: 65]のavis nišn=n'est pas separableに準じて修正した。

ham h r st xwad y h +ud Weh D n [r st xwad-

y h]⁽²⁹⁷⁾ud pad

ham h Weh D n ud r st xwad y h _ Weh-D n

im w z čiy n

xwad y h d n d n xwad y h m day n ow n axwad y h

agd n-

h-iz ud agd n h axwad y h-iz

(59) abar weh ud wehdar ud wehdom ud wad

ud wattar ud

wattom andar mard m az nig z Weh-D n

h d weh amarag n h amarag n + staw n n

abar Ohrmazd

d n padis y nazd k h d d r-Ohrmazd ud

wehdar

wehdom andar aw š n andar-tar n andar-

tom n Ohrmazd

第47ページ翻訳

と(その)学とはみな, マズダー教の存在から,(そして)

意図

と言語と行為に関する知識

それはマーズデースン者(ら)

297 []内は, コピーイストが1行下の文を重複して誤写したと見て, 削除。

のもとに，そしてまたそれは
(彼等の) 研鑽の故に来たところのもの からこそ来ているもの。
(即ち) みな，マズダー教の存在
と所詮とから現れているのである。

(58)²⁹⁸ 王権とデーンについて。ウェフ・デーンの示教から。

さて，「王権即ちデーンにしてデーン即王権」とは ウェフ・デーンの示
教から出た基本的
存在(事実)で，これは，説

298 本章は，Molé [1963: 51-52]が，イランの王権とゾロアスター教の相互依存関係を解明する際に，典拠の一つとして指摘している部分。モレは，歴史的な展開を捨象して，このような記述の集成から「古代イランの社会構造」を取り出そうと試みた。しかし，イラン史上，こういう形で宗教と王権が関わり合ったのはサーサーン王朝時代だけであって，この状況を直ちに「古代イラン社会(アリア人の移動後に限っても，ハカーマニシュ王朝やアルシャク王朝時代が含まれる)」全体に一般化するのには難しいかも知れない。

なお，この「王権と宗教の相互依存」のイデオロギーは，アッパース王朝時代の初期の思想家イブン・アル・ムカッフアウ(d. 756)まで継承され，影響力を保った。Shaul Shaked, "From Iran to Islam: notes on some themes in transmission 1, 'Religion and sovereignty are twins' in Ibn al-Muqaffa's theory of government. 2. The four safes," *From Zoroastrian Iran to Islam*, Aldershot / Hampshire Brookfield / Vermont, 1995, pp. 31-67参照。

299 原語はhambas n k šで直訳すれば「教義の敵対者たち」の意味。Molé [1963: 51]は，les adhérents des k šとフランス語訳し，Fazilat [2002: 99]は，k š n - s zg r b d n-e beh とペルシア語訳しているものの，具体的な特定には踏み込んでいない。ゾロアスター教神官から見て「教義的な敵対者」でありながら，「宗教と王権の相互依存関係」を強調したとすると，ビザンティン帝国のキリスト教，

(k š) が矛盾しているものたち⁽²⁹⁹⁾の主張(w zag)の中においてもその点では合意されており、そのかれらは王権は⁽³⁰⁰⁾デーンの上に(そして)デーンは王権の上に確立すると説き(k š)ているのである。これはまさに善き人々のデーンの根幹たる根源という語は「Ohrmazd の下僕(しもべ)たる身分への堅信と dn の高揚は相互不可分であり、エーラーン(アーリア人)の王権の高揚はデーンや Ohrmazd の下僕たる身分から来たり、デーンが最高位にあることは王権から来る」であると、こういうことだ。かくて両者が正しい王権とウェフ・デーンとが合一することにより、かつ また

ウェフ・デーンと正しい王権が合一することによって、諸創造物と密着すれば、特に光輝と利を大きくするであろう。これ即ちウェフ・デーンのこの語すなわち(čiy n)「王権即デーン、デーン即王権とは基本的にはこういうこと：無王権は邪教にして邪教は無王権」ということ。

(59) 人のうちにてよきものとよりよきものと最もよきもの、
並びに悪しきものとより悪しきものと
最も悪しきものについて。ウェフ・デーンの示教から。

アッバース王朝のイスラームなどが考えられる。

300 伊藤氏は、明らかにxwad y h = 「王権は」を見落としているので、原文に従って補った。

さて、善きものとは、創造主 Ohrmazd に近いために Ohr-

mazd の

デーニに集団として帰依せる集団のことである。またより

善いもの

最も善いものとは彼等の中で、一切善の根源たる

創造主 Ohrmazd により近くまた

第48ページ転写

d n padis y +nazd ktar h ud nazd ktom h wisp

weh h []

bun d d r-Ohrmazd ud wad amarag n h

amarag n staw n n

abar wad d n nazd k h Gan g M n g

r y ud wattar ud

wattardom andar-tar n andar-tom n +wad

d n nazd ktar h ud nazd ktom h

ham g +wad h bun Gan g M n g r y ud k š

d r n k +wad h-iz

jom weh h bun yazad ast k š -š n k š+wad

čiy n jom Weh D n yazad payw nd ud +wad h-iz

ud

+wad n yazad nazd k h [] im d m guft baw d

čiy n

weh n ud weh h []

(60) abar xwad y h mard m ud r y nišn

padiš az nig z Weh-D n

h d az d d r frišn ud +dahišn amarag n mard m

gy n xwad y ast abar n xw š tan d d st d

-š n ay r h az andar n tan b y ud pad [-iš]

w r n r g

[ud] xw st r ud ay ft r ud pad g š z d št r

ud a y dg r pad xrad z r niger d r wiz ngar ud

k r g n d r

ast d nišn⁽³⁰¹⁾ ud p k h +wišād h [] r h r y az axw

menišn pad nazd ktom h yazad n -iz

m n g w nišn h []

ras d az b r n tan 7 jud w spuhrag n

fr dag +targum n aziš 5 d xw n nd s hi-

šn n-iz ud

h nd w nišn +ašnawišn čaxšišn hamb yišn ud pahr-

m hišn k

301 Menasce [1973: 67-68]は, ast d nišnの部分を省略して訳出していない。

第48ページ翻訳

最も近いために、Ohrmazd のデーニに属する、「より」の
仲間と

「最も」の仲間のこと。また悪しきものとは Gan g M n g に近

いたために悪しきデーニに集団として帰依せる集団のことであ
る。またより悪しきものや

最も悪しきものとは、一切悪の根源たる Gan g M n g に
より近く また最も近いために

悪しきデーニの属する、「より」の仲間と「最も」の仲間のこと
である。そして悪の根源も

善のととも神であると説くドグマ者たち⁽³⁰²⁾ その彼等は説く

「悪人は

ウェフ・デーニ者と一緒であるかのように神に結びつく」と。しかし（これ
では）悪と

悪人どもも、善人たちや善が（そうである）ように、神に近きものと、この
ように（im d m）

言ったことになる。

（60）⁽³⁰³⁾人間の統括力（宗主権）とそれによる統御

302 ここで言及されている「ドグマ者たち」とは、明らかに、善と悪を同一の根元に由来するものと見なすイスラーム教徒である。二元論から一神教への典型的な反論。

303 本章は、サーサーン王朝時代のゾロアスター教の認識論に関して、最も纏まった記述の一つである。しかし、管見の及ぶ限り、本章を主題とした研究はない。以

について。ウェフ・デーンの示教から。

下、本章の認識論の内容を図示してみよう。

人間の内発的認識作用

生霊（君臨） 身体 = 内部から意識が発生し，3タイプの能力を持つ

- ・記憶の力 = 対象を求めて獲得
- ・耳の力 = 保持・回想
- ・知恵の力 = 囑目・識別・活動

天眼（メーノグ的観照）に到達することが可能

人間の外発的認識作用

身体の外では7つの特別なものが創出されて，意識に影響を及ぼしている

5つの感官 = 身体の外部の情報を内部に運ぶ役割

視覚 / 聴覚 / 味覚 / 嗅覚 / 触覚

（残りの2つの器官） = 身体の内部の情報を外部に運び，外部に意欲と考えを示す役割……本文中に明示されていない

*

*

*

以上の中で，5感を介して外部の情報をキャッチするとの所説は，ヘレニズム思想を継承した部分と考えられる。

問題はその次の記述である。それによると，生霊（gy n）が身体（tan）に君臨し，身体の中に意識（b y）が付与される。そして，そこから記憶の力（w r n r g），耳の力（g š z），知恵の力（xrad z r）の作用によって認識（d nišn）が生まれる。更に，それは，生气（axw）から思考（m nišn）への道が清浄であるが故に，神々に至近なるが故に，メーノグ的観照（m n g w nišn h）にまで至る，とされる。後半部分で，人間の認識作用とイランの皇帝統治とのアナログ的な記述が見られるので，サーサーン王朝時代の統治体制との類似から，ゾロアスター教に独特の認識作用を想定したのかも知れない。今後の検討課題である。

また，人間の内発的認識の最高形態として記述されている「メーノグ的観照」の内容は，サーサーン王朝時代のゾロアスター教神官が自力救済の可能性をどう捉えていたかを探る上で重要だが，現在までのところ古代イラン学・宗教学の研究対象になっていない。名称から察すると，時間や空間の支配するゲーティグ界を内破して，神々の住まう微細なメーノグ界まで観照する能力のようである。これも，今後の検討課題である。

さて、創造主の創出と創造により 一般の人（々）の生霊は己

が身体に君臨する王者である。身体の

内部から彼等（人間）を助けるために、意識（b y）が賦与された そして

記憶（w r）の力によって それ（意識）は（対象を）

求め且つ獲得するし、また耳の力によって保持し

且つ回想するし、また知慧の力によって囁目し 識別し そして活

動させる、

これが認識である⁽³⁰⁴⁾。そしてそれは生气から

思考への道が清浄無碍なるが故に 神々に至近なるがために 天眼にも

到達するのである。体外からは七つの別々の特別なものが

創出されて通詞となっており、その中の五は感官（s hišn n）とも

呼ばれている これ

視覚、聴覚、味覚、臭覚および触

覚であり、これらは

第49ページ転写

kard st d az b r n r zan [ud] m n g wid rd r

304 サーサーン王朝期ゾロアスター教の認識論については、第62章も参照。

kadag

xwad y ab yišn g +r šn h kadag ud k +targum n

ast

m day n uzw n n az andar n kadag xwad y

wurd r

+ g h h b r n [ud] nim d r čē-š k m ud menišn

pad n[n] w nag kard st d har mard m pad [an -

g h]

xwad y h abar n xw š tan ud wiš dag h k m

padiš

čiy n aw š n g h n xwad y pad šahry r h abar

g h n k mg r n padiš ud pad hamburd r h

abz r n

d n g h r y n d xwad y h abar tan n m h d

huxwad y

ud paywand h d n xwad y h ab rdar asazišn g-

n š d ⁽³⁰⁵⁾

šahry r h pad n m n g axw n baw d freh

ud bu[p]rzišn g xwad g ud ka dušburd r baw d

abz r n

duš g h wi si stag h n xwad y h u-š wt g

305 原文ではš t yとあるが、修正。

[ud] kun h d ham g an g dušox baw d dušfarrag
ud
ni k h dag xwad y abar xwad h hann m d d r-
Ohrmazd andar +g t g dahišn n
pad Wahman mehm n axw ud Spandarmad +w rom
g h ud Sr š
d št r menišn spurr xw bar bo wa ndag +d d g
+hufram n xwad y
ahlaw mard ud n -š hann m pad tan g ud jān g
abz r
ud hann m y ahlaw pad š [pad] ka pad g h h
d m n
dahišn n parwand as[]m n w nag ud pad w r
ka pad r st
ay bag h d nišn n t z h taxš m n g [] ud pad
xrad ka
pad d nišn n k r n ud tis n purr +purs h d
y h h

第49ページ翻訳

家長の必要とする明かりを屋（内）に入らせる，外からの窓の

ようにつくられており，そして大事なことば

の一つの通詞，（即ち）内側の家長のものから

情報を

運んできて外部に 彼の意欲と考えが何であることを示すところの
ものである。

このような具合に 人間もみなつくられている おのが身体

に君臨する統括力とそれによる意欲の無碍^{むげ}な自由伝達に

おいて 。

あたかも 世界の帝王(ら)が、彼(等)に協同する、世界の行

政吏に君臨する統主権により、且つまた 諸力を賢明に統

御する統一力によるが如くで、(この)身体に君臨する統括

は善治(者)と名づけられ

そしてこの統括力は 至高の不滅なる方々の

至福につながるのである。

メーノーグ的領域における統括力は さらに大きく

且つ称賛さるべき王者である。だから 彼が諸力の悪

運搬者となり

愚昧なるときは、この統括力は崩壊し、彼は独り

ぼっちに

され一切不祥なる悪界に墮し、悲惨にして譴^{けん}

責^{せき}されるべきものとなる。ゲーティーング界の諸創造物の中では(彼等の)自性に

君臨する王者は創造主 Ohrmazd の肢分である：

Wahman にとって宿が生气であり、また Spandarmad にとって心が

居所でありまた Sr š にとって支えてくれるものが
思考であることによってである。完全で慈愛あり完璧で合法的な、
(そして) 善き命令を発する王者は
天則者にして、その彼の各肢は身体的な且つまた生靈
的な力と共にある：
而して、通曉 (g h h) をもって もろもろの創造物・被造物を
囲繞すること蓋天がいてんのごときときは、その天則者の肢
分についていえば 理知 (š) によってであり；またもろもろの
知識の獲得に際し速きこと
火の如きときは記憶 (w r) によってであり；また

もろもろの知識をもってもろもろの働きやもろもろの事物について
十分に質問され、情報がウェブ・デーンと

第50ページ転写

Weh-D n ham wiz n ud pad [ud] abz n g h ud bo wa n-
dag-menišn h padiš
parw nag pad saxwan ud kunišn pad dil ka pad
abardar tag g h
am wand har [u] gan g ud +atars az č [ud] an g
ud pad čašm
ka pad hučašm h xwarš d pad g š ka huniy š h
Sr š
ud pad uzw n ka pad r st h guft r h Rašn h -
wand

ud pad dast ka pad huwaršt +warz h ud pad pay

ka

pad ahl y h abar raft r h ham šag tuxšag ud ham

passazag

[ud] pad-iz ab r g ĵ n g ud tan g abz r

(61) abar +w n bd g xwad h ud hann m Gan g M n g

az nig z Weh-D n

h d w n bd g xwad h Gan g M n g pad Ak man andar

axw menišn raštāg⁽³⁰⁶⁾ Tar [k]mad tar +w rom ud +payg m (p'ym-)

Xešm andar

menišn +paywastag⁽³⁰⁷⁾ ad dest n duš bar +dušfram n

d m n

du šmen s st r druwand mar ud n -š

hann m pad tan g ud +ĵān g abz r ud

hann m [ud abz r o] y druwand pad w r ka

t z [w] z r ud pad š

ka afram š k n ud pad +abes hišn⁽³⁰⁸⁾ weh ham šag

306 分詞構文。

307 分詞構文。

308 原文に従えば, hand sišn = 思考である。Menasce [1973: 67]は, la réflexion bonneとフランス語訳し, Fazilat [2002: 221, \.o]も, hand sišnと転写した上で and she-ye n kとペルシア語訳している。しかし, 意味の上からは, 「不断に善を

+ka (ud)

ham šag +an g h +aziš ud pad k m ka-š har kas

r y ng h

ab y dan pad z ka-š g h n pad k sumbišn

andar

b rdan hang ud pad waran ka pad wattar

d n ham fr -

h h h mg h d d damišn h abr xtag pad

Tar [k]mad pad rmad

ka s h n dag ham paywast ud pad ahlom h ka

darak

+Kniy h g w nag [] Gan g M n g d d r

pad aš ka

第50ページ翻訳

同じ区別（弁別）に達するときは，知慧（xrad）によってであり；また

ことばと行いにおいてよって以て

先達（となるとき）は恩寵性と円満心によってであり；

至上の勇氣をもって

どんな敵にも強力でありまたどんな不祥にもたじろがないときは心

（dil）によってであり；また慈眼をもって太陽

（さながら）のときは眼によってであり；また Sr šのよき聴従

思考すること」と「不断に不祥が到来すること」とは，寧ろ逆比例の関係と思われるので，このように修正した。

(さながら)のときは耳によってであり；
また発語の真実なるにおいて Rašn さながらのときは舌によ
ってであり；
また 善行をもって行動するときには手によってであり；また
天則をもって躍進するときには
足によってであり；その他の，生霊的および肉体的
なる力によっても
常に作動し そして同じように適応するのである。

(61)ガナーグ・メーノーグ⁽³⁰⁹⁾の眼にみえる自性と肢分(分身)
について。

ウェフ・デーカの示教から。

さて，ガナーグ・メーノーグの自性が眼にみえるのは Ak man⁽³¹⁰⁾ が生気の

309 ガナーグ・メーノーグ (Gan g M n g) は、「メーノーグ的な破壊者，破壊霊」の意で，アヴェスター語のアンラ・マンユ (Angra Mainiu) に該当するゾロアスター教の悪魔の首領。パフラヴィー語としては，アフレマン (Ahreman) と同義。オフルマズドの善なる動物，規則正しい恒星天の創造に対抗し，悪なる動物，不規則な惑星を反対創造して，宇宙的規模での闘争を挑む。しかし，ザラスシュトラ・スピターマの啓示を阻止できず，終末の日には善なる勢力に圧倒されて滅亡することになっている。

310 アコーマン (Ak man) は、「悪なる思考」の意で，アヴェスター語のアカ・マナフ (Aka Manah) に該当するゾロアスター教の悪魔の一種。悪魔の序列では，アンラ・マンユに次いで第2位を占める。善なる思考の天使(アヴェスター語でウォフ・マナフ (Vohu Manah) / パフラヴィー語でヴァフマン (Vahman)) の対抗悪魔に当たる。アンラ・マンユの指令を受けてザラスシュトラを誘惑するものの，失敗。終末の日には，ウォフ・マナフに粉碎されることになっている。

なかにて（人間の）心を染め，Tar mat⁽³¹¹⁾ が蔑視や蔑語となり，

Xešm⁽³¹²⁾ が心の

中に結びついて，不法で悪を働き悪い命令を発し 諸創造物の

敵たる暴君⁽³¹³⁾・不義の mar がいることによって（pad⁽³¹⁴⁾）である。そして

それは彼（G.M.）の各肢分についていえば，身体的及生霊的な力（用具）によってである。又彼の不義者の肢分についていえば 速やかに傷つける時

は記憶（w r）によってであり，又 恨みを忘れぬ

時は理知（š）によってであり，また 不断に彼から不祥が来るときは

善の不断の

滅亡（破壊）によってであり，また 彼が誰れ彼れなしに誰にでも

不祥を要請する時は

意欲によってであり，又 世界が彼の突き刺し（sumbišn）によって

311 タローマド（Tar mad）は、「背教」の意で、アヴェスター語のタローマティ（Tar maiti）に該当するゾロアスター教の女悪魔の一種。豊穡の女神（アヴェスター語でスペンタ・アールマティ（Spenta rmaini）/パフラヴィー語でスパンダルマド（Spandarmad））の対抗悪魔に当たる。ゾロアスター教聖呪の1つ、アルヤマン・イシュヤー呪（Airyaman Išya。本来的には病気治療の為の聖呪）を唱えることによって撃退可能。

312 ヘーシュム（X šm）は「憤怒」の意で、アヴェスター語のアエーシュマ（a šma）に該当するゾロアスター教の悪魔の一種。忠実の天使（アヴェスター語でスラオシャ（Sraoša）/パフラヴィー語でスローシュ（Sr š））の対抗悪魔に当たる。ザラスシュトラ・スピターマの時代には、隣国の王アルジャースプに取り憑いて、ザラスシュトラの保護者ウィシュターズプの王国への侵略を教唆したものの、アヴェスター語の聖呪によって撃退された。終末の日に、スラオシャに粉碎されることになっている。

313 第54ページの第17-18ページを参照。

314 本ページ第11行目のpad。

呑嚙^{どんぜい}引力の中

に入る時は貧婪 (z) によってであり, 又 煙を吐き乍ら燃えて

極悪のデーと同

説 同調する時は貧婪によってであり,

卑劣の感情に陥りて (G.M.) と 合体

するときには蔑思と卑心によってであり, 又 キリスト教の習法

の章節で⁽³¹⁵⁾

Gan g M n g が創造主となっているのは (lit. 時は) 破義によってであり,

Fr siy b

第51ページ転写

Fr siy b h wand arešk [ud] abar ham g weh

dahišn Dah g

pad gilag ka⁽³¹⁶⁾ +as g +an k h d n weh

ud pad gaw

ka pad dušwaršt warz h ud pad azb r ka pad

315 darak +Kniy h g w nagで、「キリスト教の習慣の章節で」の意味。この部分だけは、後から挿入された印象がある。写本では、この部分の最後に全く不適切な形で が付されていることも、これを裏付けている。おそらく、シリア語訳がアラビア語訳の形で『聖書』を知った神官が 後から加筆したのではないだろうか。

なお、東方シリア教会は、5世紀にはペシッタを公認聖書にして、サーサーン王朝下のイランに進出し、教線を拡大していた。シリア語訳聖書を知ったとすれば5世紀以降の神官。また、聖書のアラビア語訳は8世紀の所産。こちらを知ったとすれば8世紀以降の神官。

316 kaを補わねば、文意は、「不幸によってDah gの (Dah gから出た) 無数の不幸が善きデーにあることになる」と訳される。

duš bar dw ristan duz ud +gurg h wand g h n
marnj n d r ⁽³¹⁷⁾

第51ページ翻訳

とひとしい嫉妬がすべての善き創造物の上に及ぶのは (lit. 時は)

眼 (aš) によってであり

ダハーグの無数の不幸がよきデーニにあるのは不幸に

よってであり 又 悪行を以て行動する

時は手 (gaw) によってであり, 又 悪行しながらの馳駆によって

盗賊や狼とひとしい, 世の毀損者となるときは足 (azb r) によってで
ある。

317 Madan版第51ページ第4行目まで。